

満州(現・中国東北部)・シベリアで過酷な青春を送った元テラーの物語

語り手:久保田利雄さん(昭和2年生れ・杉並区和泉1丁目在住)
インタビューー:松岡洋介さん(和泉中学校3年生・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■満州での生活

久保田さんは、新潟県の燕の出身ですが、14歳の時に親の反対を押し切って満蒙開拓青年義勇運に志願しました。満州(現・中国東北部)の広大な土地に憧れたそうです。北満のジャムスの近くの追分訓練所というところで農地開拓と軍事教育を受けていました。

渡満した昭和17年は連日の降雨で大洪水が起きて鉄道が流され食料輸送が止まり、食糧がなかったのも、しょうがなく草を食べ、栄養失調になりました。多くの者がアメバ赤痢にかかり、1日に40～50回トイレに行ったそうです。でも、幹部の検閲があったので、家への手紙に本当のことを書けませんでした。「満州はよいところです。毎日楽しくらしています」と書かないと、いけなかったそうです。

その後、ソ連と戦いました。伝令として馬に乗り戦場を駆け巡っていたそうです。兵隊が地面の中のタコつぼに爆弾を抱えて入り、敵の戦車が来たらキャタピラに飛び込むという自爆作戦も見たそうです。また、大きなソ連の戦車を見て、「これじゃあ、勝てない」と思ったそうです。

ソ連軍から逃げる時は悲惨でした。軍事教練を受けていない人は、逃げるのが下手でほとんど死んだそうです。逃げる途中で死体の山を見たそうです。また、8月の満州は、ハエがとて多いので死体はすぐに骨になったそうです。そして、8月18日に日本

の敗戦を知り、ソ連がきて武装解除され、その後シベリヤに連れて行かれ3年半の抑留生活を送ることになりました。

■ソ連での捕虜生活

久保田さんは馬の管理をやりましたが、ロシア語で指示された意味が分からず、けとばされました。ほとんどの人は山で木を切り倒す伐採の仕事でした。ノルマを達成したら仕事を終わりにして良かったそうです。ロシア語を知らなければ損だと考え、1日に30語ずつ覚えようと思いました。先生がいなかったのを物にロシア人に見せ、日本語で言いロシア語で、ロシアの兵隊に発音させては、メモして覚えました。5,6ヶ月後には、だいたい覚え、1年後には不自由しなくなったそうです。捕虜の間は、それ以後、馬屋では、通訳として重宝されたそうです。日本に帰った後もロシア語は通じたそうです。また、若いころに覚えたことは忘れないと言っていました。でも、年取った今は、昨日のことでも忘れる、と笑っていました。中高生の皆さん、今のうちにいろいろなこと(勉強など)を覚えましょう!

ロシアの食糧の分配は公平でしたが、少なかったのもスミレ・タンポポなど、ほとんどの草を食べていたそうです。ネズミ・カエル・イモムシは美味しかったそうです。また、キノコやイナゴも食べましたが、毒キノコには当たらなかったそうです。大きなフキがあったのでそれも食べましたが、ヘビだけは、苦手で食べなかったそうです。ほかの人は、食べたそうです。排泄物は、草を食べていたので緑色だったそうです。

2年目位から穀物が出ました。精製していない麦で作った黒いパンやコーリャン(中国の穀物)です。久保田さんは馬の管理をしていたので、馬の飼料を失敬して食べたそうです。今思うと馬には申し訳ないことをしたと思っている。あるロシア人将校の家の

ペーチカの薪運びをした時、たばこをくれたり、すごい格好の日本人捕虜を家にあげてくれた上に、食事をさせてくれたので久保田さんは感動したそうです。お風呂に入れないので、体も顔もまっ黒に汚れ、人の肌色をしているのはまぶたと唇だけ、そんな久保田さんを差別することなく、家族と一緒にのテーブルで食事をふるまってくれたそうです。そんなロシア人に接したからでしょう、久保田さんは、「共産主義は嫌いだが、ロシア人達は人種差別がなくて、お人好しで大好きだ」と言っていました。

捕虜生活では、ずっと「もうすぐ帰れる」という噂が数え切れない程流れたそうです。その時は、噂が、なぐさめになったそうです。そして、昭和23年12月1日ついに帰る時がきました。鉄道に乗り、港で船に乗り舞鶴港に到着しました。



▲昔の地図を広げて満州時代の思い出を語る久保田さん

■帰国後テラー(仕立屋)を開く

実家は農家だったので、戦争中に米を多く出したごほうびにもらった、キャラコという生地がたくさんありました。それにミシンとYシャツの型紙があったのでキャラコでYシャツを作りました。自分でつくったYシャツをみんなが欲しがり、たのまれてつくってやっているうちに、この作業が楽しくなり、姉の「お前は仕立屋にはなれない」という言葉に反発し、仕立屋への道を歩み始めました。



家の近くにある洋服屋に弟子入りし、2年間で修行を終えました。東京に出て、渋谷の店で働くようになりましたが、仕事が少なかったのでダブルという難しい縫い方に挑戦し成功したそうです。その後コンテストで特選をとり、店を開くことを考えました。店を開くために裁断の勉強をし、免許をとった後、今住んでいる和泉に店を開きました。従業員は、働きもので助かったそうです。



▲絵は独学で覚えたという久保田さん。風景画、人物画・・・モチーフは多種多様。

■テーラーを辞めた時

久保田さんは60歳になったら商売を辞め、好きなように暮らしていこうと考えていたそうです。しかし、辞められなかったそうです。しかし、幸運にも(?)平成7年に、テーラーに最も大事な右手の人差し指を自分の不注意で窓サッシに挟み切断してしまいました。それをきっかけに久保田さんは仕事をきっぱりと辞めたそうです。ちょうど良かったと言っていました。

今は、絵を描くことが趣味だそうです。部屋には、自分で描いた、たくさんの絵がかざってありました。

■久保田さんの考えとボランティア

久保田さんは、満州とソ連での7年半は、良かったと言っていました。理由は、この7年半で、苦しさを乗り越える力とロシア語が身に付いたので、帰国後の生活が全て楽しく思えるようになったからだそうです。

また、久保田さんは今の人達は幸せだと言っていました。しかし、昔と今では時代が違うので、今の人達には、そのことで、あれ

これと言わないそうです。

久保田さんがボランティアを始めたきっかけは、小学生の親に子供の防犯を手伝って欲しいと言われたことだそうです。その後、「ご近所の底力」というテレビ番組で紹介され、ボランティアが辞められなくなったそうです。テレビに出た時は全国各地に散らばる戦友から電話が、きりなくかかってきたそうです。また、ボランティアは他人のためでなく、自分の健康のためにやっていると考えてボランティアを続けているそうです。

【松岡洋介さんの感想】

このインタビューでは今まで知らなかったことがいろいろとわかり、おもしろかったです。また、満州での生活とロシアでの捕虜生活の話では私達の生活について考えさせられました。

戦時中、人々は悲惨な状況でも文句を言わずに必死に生きてきました。それに対して、私達は本当に恵まれた環境で生きているのに、しばしば文句を言っています。時代が違うのだから少しはしょうがないけれど、それでは片付かないほど私達はわがまになっているのではないかと思います。

最後に、インタビューを記事にすることは楽しかったけれど、少し大変でしたがとても良い経験になりました。

【久保田利雄さんの感想】

人間は逢って話してみれば皆よい人なのです。会わずに相手を批判し合い、悪口の言い合いをすれば最後に戦争をおこしてお互いに悲惨なことになるのです。民族は違っていても付き合ってみれば必ず親しくよき友人になれます、私は身をもって経験してきました。そうすれば世界が平和になると思います。

世界の海で活躍する 女性パティシエ(菓子職人)の物語

語り手:岡田麻里さん(杉並区久我山在住)
インタビュアー:清水馨さん(和泉中学3年 女子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■子ども時代

小・中・高と有名な私立の女学校学校に通っていたそうです。学校では男子がいない分、力仕事も全部自分たちでやったり、ディスカッション(テーマを決めての話し合い)やスピーチをする事が多く、鍛えられたそうです。私たちと同じ中学生ぐらいの時は、「お金もないし、やろうとしても何もできないし、親のすねかじりだし、義務教育だったから嫌でした」と聞き、確かにおとなになってから考えてみれば、中学生では、自由じゃなかったんだろうなあと思いました。

■パティシエになるきっかけ

短大を卒業して、銀行で5年間働いた岡田さん。担当は国際業務でした、国際会議の設定や関係者との折衝に忙しかった。その中で、休みの日に友達とあちこち旅行をしていたそうです。食べることは大好きだったけれど、段々外食に飽きてしまい、だったらおいしい料理を自分で作って、家で食べられたらと思ったことから料理の勉強が始まりました。カナダのクイーンズ大学(キングストンにある)で語学留学を1年しました。それまでは英語はあまりはなせなかったそうです。それから、オタワにあるフランス系のコルドンブルーという料理専門学校に通い、料理とお菓子の2コースをとり勉強したそうです。卒業後、日本のケーキ屋さん就職することも考えたりしたのですが、全部任されてケーキを作ることができるお店

が少ないことがわかり、外国の職場を探し始めたそうです。

幸いにもアメリカ系の豪華客船(5万トン、乗務員445名、乗客定員700名)の船内にある6つのレストランのパティシエとして勤務できたので自分の落ち着き場所がきまったなあと感じているそうです。

「日本に帰ってくると落ち着くなあとと思うことはありますか?」と聞いてみると、「船の乗船契約が6ヶ月から8ヶ月で、日本にいるのが2ヶ月くらい、日本に帰ると変な感じがします」とおっしゃっていました。お母さんの手料理を食べたり、外国では食べられない和食(納豆など)をたべたり、お友達と旅行に行ったりと日本ではのんびりと過ごしているらしい様子でした。

■料理学校で学んだこと

お菓子の場合は、いちいち量を図ったりしなければつくとれないと知って、面倒と思っていたそうです。でも、先生が作る綺麗なケーキなどを見てからすばらしい!と思い始め、お菓子作りの緻密な過程に「はまってしまった」と聞きました。



▲料理学校の卒業制作で岡田さんのつくったケーキ

■ケーキ作りのよいところ

誕生日や結婚式など、うれしかったり、幸せな時に食べるものだから、作り手としても幸せだなあと思うそうです。確かに幸せなときに食べるものって夢があり素敵だと思います。

一番うれしいときは、つくったものをとても喜んでくれたり、おいしい!といってくれたりすることだとおっしゃっていました。

南北アメリカ、アジア、アフリカとクルーズの寄港地の様子が国々により違うこと、特にアルゼンチンのブエノスアイレスの下町の人々の食べものや過ごし方を聞き、見聞を広めることの大切さを考えました。

そして外国では上下関係というものが厳しくなく、クルーズ中のキッチンではたくさんの仲間と楽しく働いているとのことでした!



▲[豪華客船が職場]
自作のお菓子を前にしたパティシエ姿の岡田さん

清水 馨さん感想

中学校ではめったに知ることができないクルーズ船という豪華客船のレストランで働くパティシエという仕事の話を聞くことができ、すごくよい経験だったなあとと思います。見せていただいた写真には、とてもおいしいケーキやパティシエ仲間と楽しそうに写っている岡田さんの写真があり、とてもほほえましく思えました。

自分の好きなことを仕事にできるって素敵だなあと思いました。私も将来は、何の仕事に就くのかわかりませんが、そのときそのときを楽しみながら充実した日々を過ごせていけたらいいなあとと思います。

岡田麻里さんの感想

普段、中学生とお話する機会はまったく

↓

なかったんで、自分の子ども時代を見つめなおすいい機会になったと思います。私も中学生のころに、このようなインタビューをして、身近な大人のお話を聞くチャンスがあつたら将来についてもっと考えることができたのではないか、と思いました。中学時代は一番中途半端（大人扱いされたり子ども扱いされたり・・・）な時期だと思いますが、若いからこそどんな方向にも転がることができるので、今は羨ましく思っています。頑張ってください。

東京に沖縄の商店街を！ ～人生前向きがモットーの理容室店主が大奮闘

語り手:今泉章さん(杉並区和泉在住)
インタビュー:志田彩香さん(和泉中学3年)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■茨城の中学生のころ

今泉さんは1947年生まれで、中学時代は1クラスに60人も生徒がいて教室が足りないくらいで、いま「団塊の世代」と呼ばれている人たちの世代だそうです。教室の一番後ろまで机と椅子がびっしりと入っていたといいます。

中学3年生に秋くらいになると、だんだんと進学組と就職組とに分かれていきました。進学組は進学するための受験勉強を、就職組は社会に出て行くための勉強をしたそうです。その当時、地方の中学生の進学率は50%と、とても低かったのです。そして就職する中学生は「金の卵」と呼ばれていました。東京から会社の人が学校を訪ね歩き、「一人でも多く中学卒業生を私たちの企業にお世話してください」と担任の先生にお願いする時代だったので、金の卵といったわけです。また「集団就職」という言葉も流行した時代です。なぜなら、給料も安く済み、よく働く年齢だったからです。そのために会社が中学卒業生を欲しがっていたそうです。

■理容師の修行

中学を卒業して、理容技術を身に付けたいと思い、東京の大田区蒲田にある叔父さんが経営する理容室で修行することになりました。叔父さんの下での修行時代には良い経験をたくさんしたそうです。四畳半の部屋に住み込んで働きました。そして、そこで

の仲間3人との共同生活で人生を学んだそうです。月給というよりも、お小遣いに近い感覚でお金を受け取っていたそうです。三食食べさせてもらい、理容学校の通信教育の費用も出してもらって、当時のお金で2000円～3000円いただいたそうです。当時はラーメンが70円で食べられる時代でした。また、当時、サラリーマンの月給が2、3万円くらいで、散髪代は240円くらいでした。当時は、どの仕事もそうですが、とても大忙しだったそうです。

そして、23歳の時、今泉さんは技術の腕をもっと上げたいと考え、ほかの店で働いた後、29歳で独立し、自分の店を持ちました。



▲「映画で東京に憧れてね・・・」
修業時代の思い出を語る今泉さん

■独立の準備期間

蒲田の叔父さんの店で働いていた時に奥さんと知り合い結婚しましたが、結婚式は後でゆっくりしました。二人とも、将来は独立して自分たちの理容室を持ちたいと考えていたので、共通の夢を実現させるためにこつこつと働き、お金を貯めたそうです。人生の基盤を作るためには夫婦が協力し合い、お互いに我慢することが大切と今泉さんはいいます。

1977年、現在の場所に念願の理容室を開きました。子どもが生まれる予定だったので、そばに公園があり、しかも商店街の中にあるお店が欲しいと考えていたら、運良く

今の場所が見つかり喜んだそうです。そして、すぐに商店街の人たちと気安くお付き合いをするようになり、和泉明店街の仕事もするようになったそうです。自分の方から積極的に人と接することで付き合いが広がるというのが、今泉さんの考えです。

■和泉明店街「沖縄タウン」の活動

かつて、この商店街も、あちらこちらに空き店舗が出ていたそうです。商店街の中心地にある「大都市市場」が沖縄にある公設市場に似ているという人が出てきて、それなら空き店舗に沖縄に関係した店をよんできたらどうなのか、ということから「沖縄タウン」の発想が浮かんだそうです。和泉明店街には現在73の店舗がありますが、沖縄タウンを作ろうといっても全員賛成ということにはなりません。そこで商店街の有志37人が集まり資本金1千万円で沖縄タウンという会社を設立したそうです。これなら自分たちの意思で素早く行動できると考えたからです。この会社で、直営店のお土産屋さんも経営しており、利益が出たら明店街を良くすることに使うといいます。そして、少しずつ賛同者を増やしていくこと、無理に大きくはしないこと、やりたい人が出てきたら喜んでむかえ入れることを仲間と約束しているとのことでした。 私たち中学生でも、人に無理やりいうことをやらせようとするとうまいかなないので、この考え方はよく分かります。

ところで、今泉さんが一番驚いたことがあります。それは、沖縄タウンを企画してから、「商店街の活性化のために何かお手伝いさせてほしい」というボランティア応援団が100人以上も集まったのです。専門的な経営の問題の相談にのり解決してくれる人、会計士の人、チラシと看板作りのアドバイスをしてくれる人、芸能人を紹介してくれる人など、さまざまな人が来てくれて、あつ

↓

という間に人のネットワークができてしまったそうです。なるほどそういうことかと感心しました。

今泉さんは沖縄タウンで事務方の仕事を引き受けています。苦勞すること以上に、「おかげさまで、経理の帳簿をつける、パソコンをいじる、人と折衝をするなど、今まで経験してこなかったことができるようになった」と喜んでいます。そして、今まで考えもしなかった知恵が商店街から生まれるようになり、この街を訪れる人たちも徐々に増えているということでした。

人と付き合うことで情報と知恵が生まれると聞きましたが、自分では、納得する部分とそうでない部分が混じり合っています。



▲一歩入れば、そこはもう沖縄の町・・・

【志田彩香さんの感想】

はじめは、正直あまりやろうという気が出ませんでした。しかし、実際にインタビューを始めると話すのが楽しくなってきました。そして「私は普通じゃできないような体験をさせてもらっているんだな」と感じました。今回のインタビューで、今まで知らなかったことをたくさん教えて頂けて、とてもよかったです。

【今泉章さんの感想】

このお話をお受けしたとき、どういうことを話せば良いのか、いろいろ考えました。聞き手が中学生だということで、私の中学時代のころから30歳くらいまでのことと、現在の状況をお話しすることにしました。私が勝手にしゃべり、聞き手に失礼だったかなと反

省しています。おとなしい方で、またお年頃でもあるのでちょっと恥ずかしかったのかなとも思います。彼女はこれから大人になっていきます。いろんな経験を積んで自信を持ち、積極的に前向きに進んでいくことを願っています。良い経験を与えてくださり、ありがとうございます。

保育士はお子さんと笑いあえる仕事です

語り手：須浪澄繪さん（区立永福北保育園園長）
インタビュー：本間絵里加さん（泉南中学3年）

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



私は第二子、妹一人の面倒をみています、小さな子どもを見ていると、逆に私が元氣付けられることがあります。そのような環境でしたから、私は和泉保育園のふれあい保育のボランティアなどに参加した経験がありました。その体験から子どもと一緒に遊ぶことの楽しさを実感したので、今回は、38年間も保育士をしている大ベテランの先生、永福北保育園の須浪園長先生とインタビューしたいと考えました。この保育園は、いつも歩く道沿いにあるので何時か、ボランティアをしてみたいと考えていたところでした。

■須浪先生のこと

私は、この日をすごく楽しみにしていました。須浪先生の紹介をさせていただきます。先生は、1967年に京都保育専門学校を卒業後、杉並区職員として一環して保育園で働いている方で、その職歴の中で2000年より3年間、区の保育課指導係長を経て、松庵保育園勤務の後に、いまの永福北保育園の園長となりました。

■インタビューの質疑

Q1 須浪先生は小さい頃どのような遊びをしていたのですか

A1 夕方、母の呼ぶ声がするまで、野山をかけずり回ったり、夏になると川や海などで一日中、真っ黒になるまで遊んでいました。

Q2 何歳の時に保育士になろうと思ったので

すか

A2 きっかけは近所の子どもの子守りをしながら大きくなったので、高校の2年のときになろうと思いました。姉は、その時には保育士になっていて、給料は1万8千円でした。苦労はあるようだけど子どもの話をしているときはすごく楽しそうに話しているのを見て、保育士はいい仕事だと思いました。高2のときは、すでに専門学校に入ると決めていました。

Q3 保育士になってよかったことは何ですか

A3 子どもから、笑顔、エネルギー、元氣をもらえること。子どもはとても素直で「先生、ありがとうございます」っていつてくれるからすごくうれしい。自宅に帰るときに「明日も会おうね」と子どもたちと約束しています。

Q4 この仕事は何が楽しいのですか

A4 心から子どもと一緒に笑えることが楽しい。保育課勤務のときは、逆に笑えないこともあり、いつもギリギリ緊張しながら仕事をしていた、私は子供と離れたら生きていけないと思う。園長の仕事は大変だけど楽しい、子どもと一緒にのびのびと仕事をさせてもらっている。



▲「子どもと一緒に笑いあえるのが楽しいの」笑顔の絶えない須浪さん

Q5 逆に何がつらいですか

A5 保育園は、小学校に上がる前の子供同士がお互いにふれあうことができる場で

す、お母さんたちにお願ひしたいことがあります。「子どもが楽しく過ごす姿を素直に評価してください」「子どもとのトラブルがない親はいません、子どもと向き合っで一緒に遊んでください」とお話をしています。子どもはいつも親の言うことを守ろうとします。言い過ぎると、子どもは自分で判断しなくなります。親がいやなことは子どももいやだろうと考へないで個性として伸ばしてあげてほしいですね。

Q6 私は小さい頃から保母さんになるのが夢ですが、どのような保育士がのぞまれているのですか

A6 子どもと一緒に遊んでほしい。それから、笑顔で遊んでほしい、ゆっくり時間をかけて警戒しないで明るく遊んでほしいのです。

Q7 保育士試験ではペーパーテストがありますが実技テストもあると聞いたことがあります。実技テストとは主に、どのようなことをするのですか

A7 乳児の沐浴の練習やおしめを換えたり、折り紙を使って織ったり、現場に行っで具体的に実習したり、歌を歌ったりと日常的なことは全てやる。例えば折り紙の場合は、色々と織り方を覚えるといいですね。

Q8 先生は保育園を運営していくうえで、特に、何を一番注意していますか

A8 どうしたら子どもが健やかに育つのかを考えます、それと、やっぱり、子どもや職員の健康管理に一番注意をしています。子どもへの挨拶の仕方も大切ですね。職員は生活のリズムにも気をつけてしっかりしてもらいたいです。子どもへの挨拶「おはよう」で職員の生活が分かってしまひます。

Q9 最後に私を含め、保育士を目指してい

↘

る人に一言お願いします。

A9こんな世の中だけど、夢を何時ももって
いてほしい、失敗はあってもいいから、あき
らめないでほしい。これからもっといろいろ
とチャレンジしてもらいたいということです
ね。保育園は全て人間関係の世界です、
人を育てる仕事です。



▲インタビュー後も、子ども達の遊ぶ姿を見ながら、二
人の話は続いていました。

どもたちを大切に！！

よろしくお願いします。

【本間絵里加さんの感想】

私は、今回須浪先生とお話ができる機会
があつてとてもうれしく思います。先生の印
象は優しく、明るくて話しやすい先生でし
た。インタビューしているときすごく嬉しそ
うに話していて、とても子どもが好きなんだ
ということがわかりました。私はインタビュー
していくうちに早く保育士になりたいとい
う気持ちで一杯になりました。そして、ふれ
あい保育に参加したり、ボランティアを通
して子どもたちとたくさん接してあげたい
と思いました。これからは目標を高く持ち
保育士になるという夢を追いながら頑張
っていこうと思います。

【須浪澄繪さんの感想】

本間さんとお話をしていて、こんなにし
っかりと目標をもって自分の将来を考
えている中学生にお会いでき、とても
嬉しい気持ちになりました。

子育ては、これから益々、大きく変化
していくことでしょう。しかし、本間
さんのように基本をきちんと持ってい
れば、どんな社会になってもしっかり
子育てを支えてくれると確信してい
ます。自分を大切に、そして、子

遊びをせんとや生まれけむ ～生きることの楽しさを追求する図工教師

語り手:本永安芸夫さん(区立桃井第四小学校・図工教師)
インタビューー:福島 博さん(大学3年)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



はじめに・・・私は大学で教育学を学んでいます。それだけに教育に関しては人一倍、関心を持っています。しかし、残念な事に今まで教職員の方と一対一で本音で話す機会がありませんでした。何時の日か、子どもと共に学び、共鳴しあっている先生と話がしたいと常に思っていました。たまたま桃四小のマイマイハウスのことを耳にして面白そうだなと思いました。是非この企画の代表者でもある本永先生にインタビューをさせていただきたいと思い、今回の実現に至りました。

■本永先生が教師になるまで

本永先生は広島で生まれ、その後父親の転勤の都合で東京都の世田谷区、山梨県の甲府市、小学校四年生から杉並区の善福寺で暮らすようになりました。幼い頃に泥んこになるまで遊んだり、虫を採るなど自然の中で生活した事が今でも役立っているそうです。大学では彫刻を学びました。卒業後会社勤めか教師になるか迷いましたが会社員を選びました。そこでオートバイのデザインをやり、デザイナーという小さい頃からの夢を実現しました。しかし教育実習をした時のことを忘れられず、教員採用試験を受け直し教師となりました。

■中学校の教師時代のエピソード

最初の赴任先が世田谷の中学校でした

が、とても荒れていてガラスが割れるのは当たり前という学校で、毎日が小説の様でした。教師の仕事は大変でしたが子どもたちの毎日に夢中でした。移動教室や修学旅行では自由に行動するようにして、田舎の町で古い物などを見つけながら歩くようにさせたり、スケッチさせるなど仲間と一緒に考えて色々と企画しました。今こそあたりまえのそれらの活動は当時としては珍しかったのです。生徒指導などで自宅に帰るのが23時、24時になることもたびたびでしたが、思春期、青年期を子どもたちと共に再体験した日々でした。

■小学校の教師時代のエピソード



▲桃井第四小学校で行われたマイマイハウスづくり。二つとして同じものは無く、子ども達の個性が光ります。

平成元年から小学校の教師となり最初の赴任先は目黒区の小学校でした。中学3年生を卒業させ、一番最初に受け持った授業が小学2年生だったのでギャップは大きかったです。又、その学校は総合学習(現在の「生活科」「総合的な学習の時間」の母体となる)をずっと取り組んでいた学校でもありました。学校は自由で、開放的でした。子ども達は自ら学ぶ意識が強く、時間割も自分達で組みました。パソコンも一つの部屋にあるのではなく分散方式で身近な場所に置いてあり使いたい時にそこへ行き検索出来るようになっていました。子ども達といっし

よにつくった総合学習、野焼きや地域と一緒にのキャンプなどすごく楽しかったです。自分が子ども時代に遊びの中で学んだ経験が役立ちました。この学校での体験は目からうろこで、教えるとは何か、学ぶとは何かを根底から覆されるような体験でした。

■楽しい授業

その後杉並区へ異動し東田小学校では篠笛や獅子舞の獅子頭などをつくったり、総合学習の実践をしました。

そして、今年2年目となる桃井第四小学校、実は本永先生の母校です。それだけに特別な思いがあります。ここでの活動をいくつか紹介します。

◎学校の周りの塀の36枚の絵

総合的な学習の時間として5,6生合同でグループに別れ自分達が伝えたいテーマについて計画して絵を描いたものです。その絵をアピールするだけでなく、ラジオ放送で発表したりするなど色々な形で発信しました。

◎2羽のカラフル春鳥

ニューヨーク在住のアーティスト篠原有司男さんを招き4年生・102人が体育館いっぱい段ボールを使って思い思いの鳥を作りました。104羽の鳥たちは善福寺公園に展示、発表されました。

◎マイマイハウス

マイマイハウスとは簡単に言うと段ボールでつくった背負える小さな家です。子供達がそれぞれ工夫して様々な家を完成させました。そして完成したマイマイハウスを善福寺公園や井草八幡宮に担いで行きました。マイマイハウスにつけられたピンホールカメラで身近な風景を楽しんだりラジオパチパチの放送を楽しんだりしました。そして学校に戻って来て友だちの家とつなぎ、体育館いっぱいに自分たちの村をつくりました。出



来上がって、子どもたちは一晩ドキドキ、ヒソヒソしながらそれぞれのマイマイハウスで過ごしました。もちろん大成功でした。

マイマイハウスの企画は、西荻まちメディア、ラジオぱちぱち、PTA、先生方などと地域の力を合わせて実現しました。

楽しい情報です。これからも本永先生は色々な仲間と新たな計画を立てていくそうです。

■図工とは

図工における物づくりの魅力、それは人や物と関わりながら自分の意味をつくっていく事がすごく楽しく、そういう中から学んでいく事がとても多いところです。

ピピット感じたり、習ったことを応用して、色々と組み合わせて考えて形つくっていく時にドキドキする、あの感覚はすごく楽しいです。個別に自由に活動していても隣同士にいる仲間が共鳴しあい、そこで刺激が生まれて新たに活動が始まっていく時があります。正解が一つでなく限りなく広がっていく時と答えの方向に向かっていく時と両方がある教科なのでその点も楽しく面白いです。つまり拡散的な思考と収束的な思考の二つが上手くバランスが取れている学習活動だといえます。

知識や安全面で教えなければいけない事もありますが、それよりも大切なのは同じ人間として図工室という空間の中でお互いに刺激しあいながら何かが生まれていく、ストップする事のない時間の中で常に人間が変わっていき、そんな体験がドキドキするほど楽しく面白く大切なのです。子どもたちとすると毎日、どんなに小さな事でも色々な事が起こります。その一つ一つがよい刺激となっています。

例えば、絵具でドロドロになったパレットを洗っている子供がいます。洗って流れていく水が模様になります。それが遊びになり、洗いに行っているにも関わらず違う活動が始まります。子供はぴょんぴょん跳ねて喜びます。そしてペットボトルに入れて持って

帰りたいと言いました。活動がどこでどういう風に広がっていくのか分からない、広げようとして広がっていくこともあるかもしれないが、子ども同士の関わりの中で自然に広がっていく、そういう時に一緒に楽しいと喜べるのがうれしいです。

このような気持ちを持ち続けたいと思っています。上手く作品を作り上げる為の技術、技法が昔から言われてきたわけですが、自分の意味を自分でもってつくっていく、表現を外に出していく事を通じて自分自身を知っていく、つくっていく事が重要です。その為に自由にやらせられるような環境をつくってあげるのがこちらの仕事です。



▲次々に質問する福島さんと、それに答える本永先生

■最近の子供に対して

最近の子はとっつきがいいがそれに対して固執して追求していく力が全体的に前よりない感じがします。それだけ時間的ゆとりもないのかもしれません。とにかく忙しい毎日です。結果を気にしたり、他からの評価を念頭に入れているように感じます。家庭の価値観、社会の価値観もあると思いますし様々な原因があるでしょう。昔のように毎日がたっぷりとした時間の中で泥んこになって、色々な所で試行錯誤していた時から考えればずいぶん変わっているのかもしれませんが。この問題には大変危惧しています。学校、家庭、地域、この連携をより強固にして考えていきたいと思っています。

【福島博さんの感想】

本永先生の第一印象は真面目で落ち着いていて素朴で純粋そうに見えました。先生の話を聞いていると本当に楽しいという気持ちが伝わってきました。図工について話している時は特にそう感じました。目が輝いていましたし、最高の笑顔も見られました。いい意味で少年の心を持ち続け、頭の中には誰にも分からない本永ワールドが広がっているのだろかなと思いました。でもそれでいて現状を冷静に見つめている姿は素晴らしいと思いました。又、地域との繋がりを大切に、仲間と一緒に考える姿勢にも感銘を受けました。色々な事に対しても強い信念を持っていました。会った時から感じていた先生の出すオーラは僕の恩師と同じようであり話を聞いていくうちに本永先生も本物の先生だと確信しました。

本永先生は常に楽しい方へ自分がやりたい方へ歩を進めています。「先は分からない。もっと面白い事があつたら、そっちをやっているかもしれない。」とおっしゃっていました。僕にとってみればすごく理想的な人生を送っていると思いました。とても羨ましく、本永先生のように本当の意味での楽しい人生を送りたいという思いが強くなりました。

今回、本永先生にインタビューさせていただき、多くの事を学ばせていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。この経験を大切に、今後の人生に活かしていきます。

保存料無添加のハムづくりを独力で身につけた男の物語 ～「おいしさ」と「安全」にこだわって

語り手:松澤州紘さん(杉並区清水・有限会社・ぐるめくにひろ社長)
インタビュー:小島真一さん(中瀬中学校1年)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



ぼくたちの通う中瀬中学校の前にある無添加ハム、ソーセージのお店“ぐるめくにひろ”の松澤さんにインタビューをしてきました。インタビューの中で僕が聞いて驚いたこと、すごいな、と思ったことを紹介しようと思いました。

■お店を開くまで

松澤さんの実家はお肉屋さんだったそうですが、後を継ぐのがいやで、最初についた仕事はフランス料理のシェフさんだったそうです。厨房でソーセージを作ったのが今のお店を開くきっかけとなったそうです。僕は、松澤さんが誰にもお教わらずに独学で手作りのソーセージの作り方をおぼえたことにびっくりしました。もっとおどろいたのはソーセージ作りなのに、漬物とパン作りに通じているということでした。

塩は保存のために使っているけど、塩の中に含まれている数多くのミネラル、アミノ酸が微妙な味付けに役立っているということ、酵母と綺麗な水が不可欠だという点でハム、ソーセージ作りも漬物・パン作りも同じだということでした。

その後、実家の精肉店でハム、ソーセージ作りを経て、1999年に独立してお店をひらいたそうです。現在の場所で開業したのですが大きい通り沿いの、わざと駅から遠い場所を選んで、売ることよりもよいものを作るということに集中したいと考えました。もしも僕がお店を開くことになったら売ること

ばかり考えてしまうと思ったからです。「繁盛しているのですか？」と聞くと「ハイ」と応えてくださったので、良いものを作ることでお客さんの信頼を得て、素晴らしいものは余計な宣伝なんてしなくても自然に人気が出るんだなあと思いました。

戦後、庶民に広まった食べ物は、白い食パン、トマトケチャップ、粉チーズだそうですが、ハム、ソーセージもおかげさまでよく売れる食べ物になったとのことでした。現在、ハム、ソーセージ、ウィンナーなど加工品を年間200種類ほどつくっているが、四季毎に50種類の加工品を売り場に出している、お店に来ていただけるお客様の外、杉並のスーパー、インターネット注文等で販売をしているとのことでした。

■こだわっていること

松澤さんが大切にしているのは、“おいしさ”と“安全”でこれらを実現するためにいくつものハードルを越えてきたといいます。まず、豚の解体をした後、肉をよく洗うこと。豚の45%は肉でない、内臓・骨・脂肪です。肉の80%は水分です。だから、肉と水は深く結びついている。少しでも雑菌がないように綺麗に洗う、効果的に肉を冷やすために手早く洗い冷蔵庫で冷やす、これを冷凍庫に積み替えて仕入先の栃木から東京のお店に運んで熟成庫にのける。この過程がハム作りにとても大切なのです。

そして“無添加”であること。ぐるめくにひろの製品は、保存料なしの無添加だそうです。きれいな色をつけるための発色剤や早く作るための決着剤などの食品添加物を使わないこと。添加剤を使えば、いい肉もそうでない肉も同じ味になるのでいいところもある。大量につくる会社はこれでいいと思うが、くにひろさんは一つ一つの豚のおいしさを引き出したいので無添加にしています。1994年、スラパクト国際見本市食肉

加工コンクールに参加しシシリー、ポーク&ビーフの2つが銀賞を受賞しました、これで松澤さんの無添加へのこだわりが実を結び、現在へとつながっている。さらに1997年にも同じ国際コンクールでも銀賞に輝いている。銀メダルは、一寸貸して下さいと頼まれ渡したら戻ってこないの今は持っていないのです、といって笑っていました。



▲「おいしくて安全」それが「ぐるめくにひろ」のこだわり

■仕事を通して考えること

みなさんがおいしく安全に食べるには無添加が一番！だから塩は、大地のミネラルが豊富に入っている自然界のものを使い、抗生物質入りの飼料で育てられた豚はつかわない。ミネラルウォーターを飲んで、環境のよいところで大切に育てられている豚を利用するそうです。

「豚や牛は人間に食べられてしまうから、かわいそうだという人がいるけれど、豚を育てる農家の人だって、正月も休むこともなく、懸命に世話をしている。だから、野菜や他の食品と同じように、残さずに綺麗に食べてあげることが本当なのではないか？」と松澤さんは言いました。自分の子どもでも食べ物を残すことは許さないそうです。

食べ物は見た目だけでは品質も味もわかりません。おいしいものをつくるには、おいしいものを食べることが大切だといいます。松澤さんは、大変なグルメでおいしいものを食べるために旅行にも行きます。ヨーロッパ



パでは仕事のついでに、イギリス・ドイツ・イタリア・オランダなどのサッカー観戦もする。松澤さんもサッカーをやっていたし、子どももサッカーをしているそうです。



▲「まだまだ、たくさん夢がありますよ」笑顔で語る松澤さん

■松澤さんの夢

夢はおいしくて安全なハムやソーセージを作る職人さんをたくさん育て日本中の人たちに食べてもらうことだそうです。ただ、毎日やっても、松澤さんと同じように作れるようになるには最低でも5年はかかる。もちろん、その後も自分で失敗をくり返しながら、よりよいものを作るように毎日努力しなければならないとのことでした。松澤さん自身も、現在よりもっとおいしいベーコンが作れないかと、5年間も試行錯誤を重ねて、最近ようやく納得できるものができたそうです。現在試作中なのは生ハムで、さらに白カビで周りを囲ったサラミも考えているとニコニコ笑顔で答えてくれました。

【小島真一さんの感想】

僕は、みんなにおいしくて安全なものを食べてもらいたいと情熱を燃やすところを尊敬したいです。

丁寧に育てた豚を仕入れて、時間も手間もかけて・・・とたくさんの苦労のかかる道を選択してハム、ソーセージ作りに一生をかけている。このハムやソーセージが私たちの生活をいい方向に変えてしまうかもしれないと、そんな風に感じました。

インタビューを通じて、食の大切さ、安全

であるということ、食べたものが私たちの体をつくっていくということ、みんなにおいしいものを食べてもらいたいという気持ちがすばらしいものを作り出し、豊かなものへとなっていくことを学びました。

実際に、くにひろさんのソーセージを食べてみてとてもおいしくて優しい味がしたので間違いないと実感しました。これからも私たちに安全でおいしいものを作っていってほしいと思いました。とてもよい経験になりました、ありがとうございました。

本との出会いが私の人生を決めた ～都心に現代の書齋を実現したライブラリアンの物語

語り手：澁川雅俊さん（杉並区高井戸在住・アカデミーヒルズ六本木ライブラリー委員長）

インタビュー：大條由貴さん（上智大学 3年生・女子）

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■澁川さんと本とのつきあい

幼少の頃は、まさに「晴耕雨読」の日々だった。晴れた日には外で野球をしたりして遊び、雨の日は、近所にある親戚の書店の店頭で列んでいる絵本を読んだりして過ごした。これが本とのつきあいの原点といえる。それから60年経ち、66歳の現在までずっと本とのつきあいが続いている。

昭和12年から講談社が発刊した絵本の昔話シリーズ「桃太郎」「金太郎」「さるかに合戦」などを何度も読んだが、それ以降は同じ本を繰り返し読んだ経験は全くない。まだ就学前だったので文字は読めないが、絵をたよりに自分の頭の中で物語を組み立てていた。本を読むことで生身の自分が経験できない世界を知ることができる。例えば、「一寸法師」を読めば昔の京の都にも行けるし、鬼を退治することもできる。五感をフルに使っても森羅万象（宇宙間に存在する全ての物）を知することは不可能だが、本ならばそれが可能であることを体で知った。

本を読むというのは非常に高等な行為だと言える。例えばサクランボという文字を見て本物のサクランボをイメージすることが出来なければ本を読むことは不可能だから。

よく「私の人生を変えた1冊の本は何か」などといわれるが、読んで「なるほどなあ」と思ったことはあるが、私自身の人生を変えた本（小説や哲学書など）には出会わなかった。

■ライブラリアン人生をふりかえって

中学、高校、大学と、当然のように本とのつきあい続けてきた。この道で“飯が食えるか”などを心配したことは全くなく、好きな本を相手にしてこられて楽しい人生だったと思う。



▲基本的に好きな仕事をしているから苦労したという思いはない……

本とのつきあいを仕事にして一番の思い出は、慶応義塾大学教職時代の1996年、グーテンベルクの「四十二行聖書」を購入したこと。羅針盤、火薬の発明と共にルネサンス期の3大発明とされるグーテンベルクの活版印刷術は、ヨーロッパに一大メディア革命を巻き起こした。羅針盤は航海術を飛躍的に発展させ、乗り物の歴史を変えた。火薬は人力では動かせない巨大な岩石などを破壊することで、その後に街をつくることを可能にした。羅針盤と火薬の発明は偉大だが、活字の発明もそれらと比べて遜色ない。それは手書き文字と違い、活字なら理論的には無限にコピーを作ることができるから。翻訳は必要となるが、全世界70億人の人に同じ内容の本を読ませることが可能である。グーテンベルク聖書は、その象徴ともいえる存在で、1455年頃に印刷され、世界中で現存するのは48セットのみ。購入したのはその中の1冊で、非キリスト教国、そしてアジアの国が所有する唯一の本。購入価格は7.8億円！ 非常に高価

なものだが、最初12億円と提示されたものを3年がかりで7.8億円にまで下げた。過去100年間にグーテンベルク聖書を購入するという体験をした人はほとんどいないし、今後経験できる人はいないと思われる。

ライブラリアン人生で小さな苦労はあるが、基本的に好きな仕事をしているから、苦労したという思いはない。

■澁川さんにとって本とは……

ライブラリアンとして、ずっと本とつきあってきた私に「あなたにとって本とは何か？」という質問は医師に「あなたにとって命とは何か？」と尋ねているようなものだが、自分自身で気に入っている表現を使えば“living with books”となる。

「森羅万象」という言葉がある。現代風というと「環境」、つまり日常生活者を包む身の周りにある全てのものの意で、その中には人間関係など様々な物が含まれる。人は、その森羅万象、身の周りにあるものについて知りたいという欲求を持つ。子供が「これな～に」と問いかけながら成長していくのを見と納得できる。そして、知りたい事に対して、自分なりに得た答えが「知識」となる。その分かったことを人に伝える際に、文字、写真、絵などを用いて記録を作る。それが本であり、本は私たち人間の森羅万象に対する認知・認識の結果のテキストであると考ええる。

■子どもを本好きにするためのアドバイス

私の場合は、親が本好きにさせようと考えたわけではないが、親戚の書店に連れて行かれたことが幸いした。

寝る前に本を読んで聞かせるといったことも大切だが、親が本を読んでいる姿を見せることも有効だろう。それも、子供が「遊んで！」と言ったときにも、「お父さんは、いま



本を読んでいるからだめだよ」というように、本がとても重要なものだと感じさせることが必要である。

また、学校などで読み聞かせをしたり、図書館や書店で本を探すことを教えたりすることも大切だが、一番は家庭での環境であると思う。無理に本を読ませるといった強制的なことはしない方がいいが、常に本の存在を意識させることが重要だろう。1冊の本もない家庭の子供は不利だろうが。

しかし、本を読むだけでは正常な発達は望めない。子どもが成長するためには、友達と遊んだり、けんかしたりする実体験が不可欠である。なぜなら、自分自身にきちんとした実体験がなければ、本を読んでも自分の経験と照らし合わせることができず、内容を深く理解することはできないから。

■六本木ライブラリーについて

ライブラリーを‘人々のための図書館’という意味で使うようになったのは19世紀に入ってから。それ以前は「書斎」(自分の文庫)という意味合いが強かった。六本木ライブラリーは、その“原点”に戻って会員のための環境作りをしている。



▲「アカデミーヒルズ六本木」は、会員の「書斎」

収蔵する本の選択は、文学、科学、哲学、政治、経済、宗教などジャンルは多様だ

が、今出ている本で価値のあると思われるもの、専門書や古典を除き、一般書で「この程度の本は読んでほしい」と思われるものなどを基準にしている。また、“キャリアデベロップメント”～「私の人生、もう一花咲かせたい」と考える人のために実務書も充実させている。

公共図書館など他の図書館にできない「ソーシャルネットワーキング」のサポート、様々な講演会や勉強会など、会員のニーズにも対応している。

【大條 由貴さんの感想】

都心を一望できる六本木ヒルズ49Fの会員制ライブラリー、今まで持っていた図書館の概念と全く違った空間の中で、多くの肩書きを持つ澁川先生へのインタビューはとても緊張しましたが、実際お会いしてみると親しみやすく、不慣れな私の質問にも分かりやすく丁寧にお答えいただき、とても有意義な時間を過ごすことができました。ライブラリアンとして約50年ご活躍なさっている先生が、この間に何らかの形で出会った本は、推定で200万冊を超えているそうです。先生のお話を伺っていると、まさに“living with books”という言葉通りの生活をなさっているのがよく分かり、ご自分の好きな道に進まれ、ずっと本に関わる仕事を続けていらっしゃる人生は、生き生きとしておられとても素晴らしいと思いました。

子供時代の読書環境は大人になっても影響があるようですが、私にとっても小さい頃の読書の思い出は、今でも鮮明に残っています。それは、近くにあった個人宅の文庫(先生のご自宅で奥様が開かれている“バンビぶんこ”と似ていると思いますが)でのひとときです。自由に選んだ本を手に取り、好きな場所で開いたり、友達と一緒に読んだり、あるいは初めて目にした本に夢中になったり…。

たくさん本や友達とのふれあいの中で新しいものや意外なものに出会う喜びや居心地の良さを感じていた空間。それはどこ

となく六本木ライブラリーに通じするような気がします。

ライブラリー内のオールジャンルの厳選された本がアトランダムに配置されている本の中を、ゆったりと散歩している気分で歩き回っていると、普段気付かなかったり自分では読まないような本に出会える。それを手にとると今まで知らなかった世界が広がっていく…。ライブラリー内を見学したとき、今はもうなくなってしまった懐かしい子供文庫の自由な空間が、大人の空間へと移り変わってきたような気がしました。

澁川先生とお会いして、毎日の生活の中で何気なく接していた「本」を意識するようになり、本は手軽に手に入り、いつでもどこにでも持ち歩け、読むことが出来る、とても身近で重宝で知的な存在であると改めて感じました。

澁川先生、貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

「熱き心と夢」を持つ

語り手：伊藤 昭さん（久我山在住・吉祥寺メデオ&ダイン経営）
インタビュー：森川 修二さん（東田中学校1年・男子）



私は飲食関係の仕事に就いて、将来は独立しておいしい飲み物、食べ物を提供する店を経営したいとの夢も考えていたので久我山在住の伊藤 昭さんに、インタビューしました。

伊藤さんは、20年ぐらい前から下北沢で洋服店を経営し、さらに昨年の9月からは吉祥寺で、若い女性向きの洋服店とオープンカフェ（メデオ&ダイン 店長は30歳）を始めました。そのオープンカフェで、お話を聞かせていただきました。

父の働く姿を見ていて、洋服が好きになり「日本一の洋服屋になりたい」と思い、それを目指して頑張っている。父から学んだことは、「夢を持つ」「質素に」「謙虚に」で、目標に向かうためには必要な勉強をしようと思うし、謙虚に人の意見を聞こうと思っている。

尊敬している人は、長嶋茂雄氏。長嶋氏の「お客を喜ばせよう」とする姿勢が好きで、周りに夢を与えていると思う。中学生のころ後楽園に試合を観に行き、偶然にも球場のトイレで長嶋さんと待ち合わせた、声がなかなかでない、やっと「長嶋さん！がんばってください！」と声をかけ、またかけ返してもらったのは、一生の大切な思い出である。

夢が固まったら、その実現のために何をしたらよいかを考える。掃除もお店をよくするために必要とわかれば、前向きにできる。

今はオープンカフェを「日本の中で一番新しく、おいしいものがそろっているお店にしよう」と、海外に調べに行き研究をしている。目標とする店は、ロスアンゼルスのレストラン通りにある「フレッド・シーガル」でメインは婦人服、紳士服の他カバン、靴、化粧品などの、レストランやカフェが併設されている店です。有名ブランド物というより最新流行もの、斬新なデザインものが多いことで人気の店です。

仕事をしていてうれしいことは、経営者なので利益目標に達成することもそうだが、例えば新しいお菓子の開発をし、20名の従業員の様々な方向の意見が、話し合い、試行錯誤を繰り返すうちにだんだん合わさって行き、一つのものが完成した時だ。全員が「みんなでやった」という達成感と充実感。さらに次のものに向かおうという気持ちになる。



▲写真の前に質問する森川さんに、笑顔で答える伊藤さん

【森川修二さんの感想】

伊藤さんは、夢を持ち、熱い心の人でした。やる気がたくさん伝わってきました。夢（目標）を持つことが、大切と教わりました。私が「そうか！」と思ったことは、店の床、椅子、テーブル、棚など、商品の整頓など嫌な事（そうじなど）があっても、将来へ向けた夢があるなら目標達成のために必要なら前向きに出来ると言う所です。おもしろ

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。

介護ヘルパーとのインタビュー ～誰かのために尽くすということ

語り手：澤谷みどりさん(杉並区在住 事業所 サービス提供責任者・ヘルパー1級)
インタビュー：佐藤秀行さん(立教大学3年生・男子)



訪問介護のヘルパーをなさっている澤谷みどりさんにインタビューをする機会をいただきました。心の底から利用者さんやそのご家族の幸せを願って活動されているヘルパーさんが、そこにはいました。「私は『よくない』ヘルパー候補生です」

開口いちばん、このようにおっしゃいました。その時私は一瞬耳を疑いましたが、インタビューを終えた今、「よくないヘルパー」は同時に「よいヘルパー」でもあるのではないかなと思うようになりました。さて、以下では、そんなお仕事ぶり、ヘルパーになった経緯、心に残っている利用者さんのお話などをご紹介しますと思います。

■介護ヘルパーには「してはいけない」ことがいっぱいある

介護ヘルパーの仕事は生活の補助をするもの、と規定されています。また、介護保険のルールもたくさんあります。たとえば、窓ガラスをふく、といったことはしてはいけないことになっています。しかし、一人暮らしや寝たきりの人の場合、つい窓ガラスをふいてあげようという気持ちになるそうです。「ちょっと向こうを見ていてください」といって拭いてしまうことがいけないのかどうか自問自答する、「窓ガラスをふいてはいけないというのは、危険を伴うから」ということで理解しルールには意味があるものと思っています。ルールを守る結果、心が通わなくなる恐れはないのかと悩むことがあるとおつ

しやいます。

利用者さんやそのご家族の個々のニーズを満たすために、「この程度なら大丈夫」とルール違反すれすれのところを自分の判断で行う気持ちになるのが(つまりは良い)ヘルパーなのです。しかし、うっかりやってしまうこともある。こちらで勝手にやってしまうことは危険だから、常日頃から注意しています。強いご要望がありやむをえずの場合、「やり過ぎました。以後気をつけます」と言う場合が時々あります。習慣化すると予測がつく場合は当然お断りするそうです。一見、心の通っていないルールにも意味があり、ルールを決めることは正しい、ともおっしゃいました。「ルールは尊重しながら、気持ちを込めるのはいいのではないかなと思う」ともおっしゃっていました。

■介護ヘルパーになった経緯

民生委員をしていた頃から姑の介護を経験し、ボランティアで介護をしてから介護ヘルパーの資格を取りたいと思ったそうです。現在介護ヘルパー歴3年余。最初は3級からスタートしたけれど、アルツハイマーや認知症の人などさまざまなタイプがあることを知り、そういう方の介護をしたい、もっと病気について知りたいと思い、2級をとったそうです。また同時に、「利用者さんの金銭的な負担を減らしたい」という思いもあったようです。介護ヘルパーとして働けるようになれば、介護保険制度が適用になり、利用者さんにとっては介護サービスが安く受けられるし、自分も報酬を受けることができ、両者にとって良いと考えたのだそうです。

アルツハイマーや認知症などに関心を持って取り組み始めた頃、実際にアルツハイマーを持った74歳の女性との出会いがありました。その方は、自分がアルツハイマーになったことを自覚していなかったようです。また、その方の娘さんもその現実を受

け入れたくないという気持ちがあるように思いました。私はその娘さんの心の痛みを感じて、利用者さんを支援するだけでなく、ご家族の負担を和らげるために、色々なお手伝いをしました。「アルツハイマーを持った母子が私を育ててくれました。その方達から生きがいもいただいたと感謝しています」と澤谷さんはおっしゃっていました。

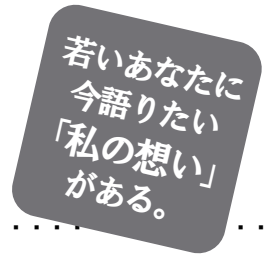
■やりがい・生きがい

介護ヘルパーになった直接的なきっかけは、姑の介護を終えた後、娘さんたちから「お母さんはもう何もなくていい、好きなことをすればいい」と言われたことだそうです。「男性が定年を迎えたときの気持ちに似ていると思う。自分を必要としている人がいないと思い込みとても辛かった。自分のやれることを探したいと思った。」

姑の介護のときには、自分は“縛られている”と感じていたそうです。2、3時間でいいから、自分の自由になる時間がほしいと思っていた。そこで、今度は、同じ思いをしている人たちの役に立ちたいと思った。つまり、当時の自分がしてほしいと願ったことをしてあげようと…。

「ダイエットにもつながるかな…」なんてことも思ったそうです。人のためになるヘルパーをしている方がスポーツクラブに行ってお金を使うより、性にも合っているとも考えたそうです。

「あなたが来るのを待っていたのよ」との言葉に自分自身の存在価値を強く感じる、とおっしゃっていました。人に頼りにされること、私を頼りにしている人がいる、それほど嬉しいことはない。人のために何かをしていることに“はまった”ようだ。家族の方から言われる「あなたが来てくれるのを待っていた」という言葉は、澤谷さんにとって殺し文句だとおっしゃっていました。



↘

■アルツハイマーの方の介護を通して考えたこと など

アルツハイマーの人の中には、尿意や便秘さえ感じない人もいらっしゃるそうです。そういう場合には、そのまま何もしなければ命に関わる事もあるので、「私が出してあげる」との思いで、何十分もお腹をさすったりするなど、利用者さんの生活リズムに合わせて、出来る限りの事をしたいとのことです。また、アルツハイマーの方は、自分の世界の中で時間を過ごしていらっしゃる事が多い、おっしゃることを否定してはいけないとのこと。利用者さんが演じる舞台に立ってさし上げる、「ハイ！そうですね、かしこまりました」と言う。こちらの考えを押しつけないで、その人の身になって、一緒に考え、行動してあげることで、その人は澤谷さんを信用してくれるようになるそうです。心休まるように自分も同じ舞台で演じることが肝心なところですよ。

また、利用者さんだけではなく、そのご家族の不安を取り除くことを大切に考えているとのことでした。実際に澤谷さんのお父様は、お母様が亡くなったときに認知症になりかけたけれども、毎日電話で話をする事で、精神的な支えができて、功を奏したとのことでした。特に親子同士の会話は、心通じ合うこともあり相手の気持ちが落ち着く、不安感はいだいぶ和らぐそうです。「誰でも年をとると不安を感じるようになるもの。昨日できたことが今日はできない。こんなはずではなかった…と思う。そういう不安やリスクを少しでも私が背負ってあげたいと思う」とおっしゃっていました。

【佐藤秀行さんの感想】

介護の現場では、利用者さんの不安感をいかに取り除くかということが問題になっているということを知ることができた。不安を取り除くために、相手の身になって行動することが大切であるということも学ぶことができた。利用者さんの不安感を取り除くために、

心を支えるヘルパーさんが必要なことと思う。利用者さんやそのご家族の気持ちを第一に考える澤谷さんにとっては、ご自身が「よくないヘルパー」か「よいヘルパー」かということはあまり大きな問題ではないのかもしれない、とも思った。